

学校経営のポイント

“夏休みのふり返りをふまえた指導”の充実

若井 彌一

夏休みが終わり、授業再開の時を迎えた。7月25日付けの本紙（No.112）で“充実した夏休み”と書ける夏休みに」と述べたが、子どもたちの夏休みはどうであったか。

“充実した夏休み”であったか

“充実した夏休み”とふり返ることのできる子どもばかりでないことは、容易に想像がつく。ふり返ってみても、これといった記憶も定かでない夏休みを過ごした子どもたちも少なからずいるかもしれないが、まずは、ふり返らせてみてほしい。

教師側の単一の観点でふり返らせようとすると、無理が出てくる。子どもたちは、単一の観点で夏休みを過ごしてきたのではない。

自由にふり返らせて、その子どもなりに、夏休みを文章化させてみてほしい。感動した直接体験をもった子どもには、それを綴ってもらえばよい。おもしろいと思って読んだ本がある子どもにはその内容を、また 継続して頑張ったことがある子どもには、そのがんばりの内容と自分の気持ちを書いてもらえばよい。

楽しい感想を書くことのできる子どもたちばかりではない。悲しい体験、くやしい体験、苦しい体験をもった子どもたちもいるに違いない。そのような体験も、これからの人間としての成長にとって貴重である。

肝心なことは、約1ヵ月間の夏休みを対象化することなしに忘却させてしまわずに、その子どもなりに思考整理させることを通して、それぞれの家庭・学校生活に意識の継続性をもたせることである。

子どもたちが文章としてまとめたものは、むしろ、夏休みのすべて（総体）ではなく、比較的印象の強い一部分である。

一部分であるから、それを全体とみなすようなことは適切ではないけれども、教師としては、夏休み後の指導に生かすことが可能である。良くも悪くも（教師の目から見れば）、それが子どもの実態なのであるから、その実態を無視しては効果的な指導は成り立たない。

学校・学習が好きになる“工夫ある取組み”

最近の報道によれば、中教審（中央教育審議会）では、高等学校での「必修理科」という科目の設置の是非が「理科離れと学力低下を食い止めよう」とする観点から検討課題となり、意見が分かれているという（8月17日付け『朝日新聞』による）。

「理科離れ」だけでなく、わが国の児童・生徒のなかには、学校での学習が好きでないと思っている者が小学校で約50%近く、中学・高校では約70%も存在するという調査結果（教育課程の実施状況調査）が出ていることは、かつて指摘したところである。

「必修理科」の設置の是非については、今後、大いに議論が深められることを期待したい。

それと同時に、個々の児童・生徒の実態をふまえた、工夫に満ちた各教科等の学習指導の実践が肝要であることを、授業再開に際して、すべての教師があらためて自覚して臨みたい。むしろ、筆者も例外ではない。

（わかい・やいち = 上越教育大学教授・附属小学校長併任）

本紙は <http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp> でも掲載

...本紙は、購読料不要です。配信の中止・FAX番号変更等をご連絡くださる場合は、抹消・登録に必要な【あて先/新旧のFAX番号】を必ずご明記ください。
...なお、本紙はEメール配信も行っております。
<http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp/kenshu> 参照。

●新刊案内● 菱村幸彦・小松郁夫・若井彌一【編】A5判260頁・定価2625円 教育開発研究所刊
最新課題24論点と小・中・高校別のエクササイズで学校の経営システムを再検討する！

《論点演習》学校経営の刷新